

なりゆき東欧の旅

Ichitarō YAMAMOTO

山本 一太郎

仕事が一息ついた昨年の秋に休暇をとり、一人で東欧を旅することにした。かつてハンガリーやスロバキアに行ったときに大規模なジプシー（ロマ）の集落を見たことがある。色白のヨーロッパ人の中で、インド人のような容姿の彼らは目立っていた。ヨーロッパ社会の中でどのような存在として受け止められているのか、興味がある。旧ユーゴスラビアには多くのジプシー（ロマ）がいるらしい。

行ったことのない土地では、さまざまな出会いもあるだろう。背負ったリュックサックには、『世界俳句』を四冊詰めこんだ。行く先々の宿に置いていくつもりだ。そのうち興味を持った宿泊客が手にとつて読んでくれるかもしれない。

昨年春にベトナムを旅した時も、泊まったホテルに『世界俳句』を一冊置いてきた。

ベトナム中部の古都フエにあるラレジデンスという瀟洒なホテルには、レセプション近くのパソコンルームに重厚感のある書棚がある。

今もその書棚に、洋書にまじって『世界俳句』が並んでいるのではないかと想像するのはひそかな楽しみだ。

今回はロンドンからクロアチアに入り、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、ルーマニア、ブルガリアを経てトルコのイスタンブールへ向かった。

夜行バスや夜行電車での移動が続くので、なかなか『世界俳句』を残して行く機会がない。

結局、クロアチアのドロブニクで民泊させてもらった家と、ブルガリアのヴェリコ・タルノヴォにあるホテル、首都ソフィアにあるホステルに一冊ずつ置き、最後の一冊はイスタンブールで会った日本語副専攻の大学生にプレゼントすることになった。

クロアチアはアドリア海に面した明るいいりぞト地。岩山と青い海に挟まれたドロブニクでは空が広く感じられる。新市の街の港には巨大なクルーズ船が停泊し、旧市街には各国からの観光客がゆったり散策をしている。宿泊費を抑えたい旅行者には、自宅の一部を提供する民泊システムが便利だ。バス停にたずんでいると声をかけてきた年輩女性がいたので、その人の家に泊まらせてもらうことにした。「旧市街まで歩いて十五分よ」となまりの強い英語で話す長身の女性が住むのは道ばたの斜面にある簡素な一軒家で、実際に旧市街まで歩いて行くと三十分も要した。翌朝まだ暗いうちに、本棚に一冊『世界俳句』を置いてから部屋を出て次の町へ向かった。

ドロブニクからは長距離バスでボスニア・ヘルツェゴビナのサラエボ、セルビアのベオグラードへと移動。

ボスニア・ヘルツェゴビナは峻厳な山が多く、幹線道路に沿って流れる川の水も青く美しい。ときおり、水晶の柱のような形の白い墓標が並んでいる一帯が目に入る。イスラム教徒の墓地だろうか。その新しさに、内戦の傷跡を感じる。落ち着いたたたずまいのサラエボ中心地はイスラム教徒の住むエリア。セルビアのベオグラードには、セルビア人居住区にあるバスター

ミナルから向かう。森を抜けて、広大な平地を過ぎればセルビアの首都、ベオグラードだ。歴史的建築物が多いけど近代的な印象のある大きな都市。散策した後に、伝統料理店でひき肉料理や肉の煮物や発行させた果実を蒸留してつくったお酒などを味わう。バルカン半島各地には、似たような料理が分布しているが、それぞれの民族が自分たちの伝統料理だと認識している。

ベオグラードからブカレストまでは夜行電車を利用する。

日が沈み、車窓の草原が少しずつ闇の中に溶け込んでいく様子を眺めていると、ありあまる時間の中で雑念があふれ出してくる。

果てしない大草原。自分がいる場所はどこだろう。むかしの羊飼いは星を見て位置を確かめていたのだろうか。

月がないと、空と草原の境目がよくわからない。星がないところが草原なのだろうか。草原にも何か光るものはあるかもしれないが、それは、人のいるしるしだとは限らない。

人の気配がないところにも、この大平原には、草に隠れがちな小さな道があるかもしれない。それは、人間の存在を示すすかな信号音のようなものかもしれない。

かつて、大平原を逃げて過ぎ去った人もいるだろう。その人は自分の影を相棒のように見ていただろうか。

そんな雑念が次々に脳裏をよぎり、連想ゲームのようにいくつかの句をメモする。

大平原射手座が明日逃げる方

大平原小道は神と話す術

平原の光ときには人家なし

大草原友の名前は日影かな

妄想俳句はいまいちしまりがいい。時間をもてあましているときに一人吟行を気取っても実りは少ない。

向かいの席の女性と子どもは静かに眠っている。ふと、コンパートメントの外の通路を見ると殺風景な印象。戦争は遠ざかったけど、まだどこかに暴力が潜んでいるかもしれない。

内戦は終わり狂気はドアの陰

ブカレストに着くとすぐに電車を乗り換え、トランシルヴァニア地方のシギショアラという古い町を目指した。

十月下旬だが山間部ではもう雪が舞っている。電車内で知り合いになったブカレストの女子大生と会話と続ける。日本の天気や地震の話、文字の話、食事の話。肉より魚が好き、というところで意見が一致。英語は苦手だけど、最低限の語彙を最大限に活かすことは楽しい。

シギショアラはお城のある小さな町。駅前の端の上ではジプシー（ロマ）の女性が赤ん坊を抱いて物乞いをしている。町の中心は歴史を感じる石畳が印象的。だが、チェコのチェスキークルムロフほど華やかではないし、ハンガリーのエゲルほどにぎやかでもない。電車の中で女の子がすばらしいと言っていたシビウという古い町にすぐ移動。広場や通りが印象的な町だけど安宿が見つからない。深夜までレストランをはしごし、午前3時すぎの電車でブカレストに向かうことにした。深夜の駅構内ではジプシー（ロマ）やホームレスが仮眠をとっている。寒くて足踏みをしていると声をかけてきた年輩の紳士は、「そうか、日本から来たのか、日本人は魚を食べてるから頭がいい、私は工業デザイナーだ」などと言っていたが、そのうち声を潜めて

ジブシー（ロマ）を指差し、かれらは×××なんだ、とつぶやいた。ぼくはきよとんとした顔をするしかなかった。

ブカレストに戻り、次はブルガリアのヴェリコ・タルノヴォを指す。琴欧州の故郷でもあるこの町は平地が少なく、丘の斜面や山すそに伝統的な家々が並ぶ。民家の軒先にはブドウのつるが絡まり、ひさしの下には燃料に使う薪が積み重ねてある。

中心部の古いホテル（Hotel Etra）から眺める風景は絶景だ。二連泊して一冊『世界俳句』を残してきた。

ヴェリコ・タルノヴォから少し離れた山の上にあるアルバナシ村には ARBAT というレストランがある。ここのチキンのクリーム煮とブルガリアワインは今回の旅で最高に美味しいものだった。

バスで首都ソフィアに行ってリラの僧院などの観光地も回った後、夜行バスで最終目的地のイスタンブールに向かう。

早朝、遠くに見えてきたイスタンブールの印象は大都会。東欧各国と違い、建設中の大きなビルが多い。走る車の量も桁違いだ。有名なブルーモスクとトプカプ宮殿を左右に見て、さてどちらから見に行こうかと思っていると、日本語を話す若者に声をかけられた。ロックマンと呼んでくれと言う彼は、トロイの遺跡に近いチャナッカレ大学で日本語を日本人女性教師から習っているという。将来ガイドになりたいのだという彼にブルーモスクなどを案内してもらった。「叔父も日本語が流暢だからぜひ来てほしい」と言われて絨毯屋について行くと屋上のテラスで食事を振舞ってくれ、なんと親切な人だと思っていたが、絨毯を売りつけるのが目的だったようだ。彼の叔父は実にダンディーかつクレバーで、絶妙なゆさぶり営業トークを駆使し、ぼくに商品を買わせようとした。もちろん、いくら安くしておくと言われても、ぼくは必要のないものは買わない。

帰国後、彼の叔父の名前（ウミット）を検索すると、さまざまな情報があった。よくもわるくも有名な人のようだ。イスタンブールの旧市街に行く人は気をつけてください。

ロックマン君、ぼくが君に「世界俳句」をプレゼントしたのは、日本語学習や文芸の理解に役立ててもらいたいと思ったからだ。巧みな言葉を、人を畏にかけるようなことには利用しないでね。

それから、タレントのふかわりようが店に来たことがあると言って写真を見せてくれたけど、ふかわりようのDJとしての名前がロケットマンだということを知ってた？ ロックマンと似てるね。ちよっとそれだけ言いたかった。